

## 東北沿岸で 目撃される 幽霊現象

深夜、駅で客待ちをしていたタクシ―に、初夏なのに毛皮付きのコートを着た三十代ぐらいの女性に乗ってきて、津波に襲われて震災後は放置されたままの地域の住所を告げた。不審に思ったドライバーが、「あそこは更地ですが、どうして?」と尋ねると、女性は急に震え声になって、「私、死んだんですか?」と聞いてきた。ドライバーが驚いて後部座席を振り返ると、そこには誰も乗っていないかった。

深夜、タクシ―が街を流していたら、小学生ぐらいの女の子が道端で手を挙げていた。八月というのに、コートにマフラーという真冬の格好。「お父さんやお母さんは」と尋ねると、「ひとりぼっちなの」と言う。迷子なのだろうと思ひ、家の住所を聞いて送っていくことにした。告げられた住所で車を止めると、女の子

# なぜ、被災地で「幽霊」がたくさん出るか

あの惨事から五年。いまだ心の傷を癒やせぬ方々が、被災地には少なくないと思われる。しかし、そのために施されるケアの方法は、本当に被災者の欲求と合致しているのだろうか?

は「おじちゃんありがとう」と言つて車を降りたが、次の瞬間にフツと消えてしまった。

東日本大震災後、津波被害を受けた東北の沿岸各地で、幽霊現象が目撃されている。とりわけ特徴的なのがタクシ―で、少なくない数のドライバーが、「幽霊を客として乗せ、会話もした」と調査者に語っている。その証言は具体的で、なかには実際には客が乗っていないのに、メーターを倒して走行した運行記録が残されているケースもあった。強いリアリティを持つこれらの証言は、私が編著者を務め、今年一月

に上梓した論文集「呼び覚まされる霊性の震災学」(新曜社)に収められている。この論文集は「震災の当事者たちは、死者に対してどう向き合ってきたか」をテーマに、私の指導する学生たちが行ったフィールドワークの結果をまとめたものである。私はこうした調査の試みを、「意識の古層にあった死が呼び覚まされる、「霊性」の震災学」と名づけた。

阪神・淡路大震災が起きた一九九五年一月、私は大学受験を直前に控えた受験生だった。その年、私は大学の社会学部に入學し、社会学の講義では震災体験の実例が取り上げられた。しかしその実例とは、直前に起きた阪神・淡路大震災ではなく、数十年前の新潟地震のケースだった。

なぜ目の前で起きた震災を取り上げようとしないのか。その疑問から「災害とは何か」を考えるようになった私は、仙台にキャンパスを置いた東北学院大学に赴任。この地で東日本大震災を体験することになった。

震災から一週間後、私はゼミの学生たちに「この震災の記録を後世に残さなくてはならない」と伝え、被災者の方々にお願いし、経験した出来事を自ら書き綴ってもらうことで、人の目から見た震災を記録する作業を始めた。集まった貴重な証言は後日、「3・11 慟哭の記録」（新曜社）として上梓されることになった。

集められた文章が実際に書かれたのは、震災後三カ月から六カ月の間である。ほとんど時間を置いていないだけに証言は生々しく、被災地には今も、「この本は痛々しくて読めない」という方が大勢いる。

## 「震災の記事は、もう配信しなくていい」

このとき意外だったのが、証言を寄せてくれた被災者の方々から、「ありがとう」「おかげで気持ちが悪くなった」と告げられたことだった。渡された本を震災で亡くなった故人の仏前に供えた方もいた。その反応は明らかに、聞き取り調査の場合と異なっていた。

慣れない文章を書かされて大変だったはずの被災者が、なぜ私たちに礼を述べたのか。出版後、私は改めて証言者たちを訪ね、この記録がど

## 「おじちゃんありがとう」と タクシーを降りた女の子が 次の瞬間にフツと消えた

のような影響をその人たちに与えたかを尋ねた。

そこでわかったのは、慣れない文章を書き、客観性を保つための書き方について調査者からアドバイスを受けることを通じて、遺族たちが罪の意識で混乱していた心を整理し、自らを客観視することができた、ということだった。

たとえば津波で父を亡くしたある人は、「自分がプレゼンしたジャンパーが、水を吸って重くなったことで、父を溺れさせることになったのではないか」という思いに苦しんでいた。しかし震災前後の状況を文章化する作業を通じ、自分の行動と父の死に関係がないことが理解でき、それによって心が楽になったという。辛い経験を書き残すという作業には、心を整理する機能があったのだ。

この震災では、被災者の心的外傷が注目されていた。だが近い家族を亡くした被災者には、「カウンセリングには行きたくない」という人が少なくなかった。

多くの死者が出た災害でしばしば

見られる現象として、生き残った人たちが、自分だけが助かったことに対し、罪の意識を抱いてしまうという問題がある。

とりわけ東日本大震災では、死者の多くが津波によるものであり、地震の発生から津波が到達するまでに数十分の時間があった。その分、人的要素が介する余地が大きく、生き残った人には「あのとき、ああしていれば救えたのでは」という後悔の念が生まれやすい。

この点、死者の多くが建物倒壊による圧死で、人が介する余地がなかった阪神・淡路大震災と対照的だ。そうした人たちにとっては、「カウンセリングによって自分が楽になる」という考えそのものが、罪の意識を刺激する。心の痛みがなくなるということは、死者のことを忘れてしまふことにつながるからだ。

しかし自らの体験を文章に書き、それを本にまとめることは、「忘れること」ではない。むしろ忘れないよう、形として残すという作業である。それは心の痛みを消すのではな

く、いわば痛みを温存しながら、それと共存していくという、カウンセリングとは異なる新たな道だった。その事実気づいたとき、私は震災の死者に関わる心の問題を、研究テーマとして取り上げようと考えた。

震災学とは、死生観を問うことである。

震災は行政においては、経済マターとして扱われがちだ。為政者が言う「復興の加速」は、瓦礫の撤去や住宅の建設、港湾の再整備など形や数字で示されるものである。が、それだけでは復興は完了しない。真の復興とは人の心の回復であるはずだ。一人ひとりの心が癒やされ、地域のコミュニティが復活することで初めて社会的意味での復興がなつたといえる。しかし、それをどう加速するのか。死生観から問わなければ、復興の定義すら定まらないのだ。

私が「震災学」という言葉を使うようになった理由はもう一つ。東日本大震災から五年、被災地や被災者に対する世の中の視線が明らかに冷めたものになってきたことがある。

NHK「被災地からの声」という番組がある。NHK仙台放送局製作による東北地方向け地域情報番組で、東北では週に一回、全国でも月に一回放送され、東日本大震災の被災者の生の声を取り上げている。

しかし最近、この番組を全国放送

で流すと、「いつまで放送を続けるつもりか。その後にもたくさんの方々があつたのに、なぜ東日本大震災ばかり取り上げ続けるのか」「文句ばかり言っているから、復興が進まないのだ」といった苦情や非難が寄せられるのだという。

通信社に対し「震災の記事は、もう配信しなくていい」と伝えた西日本新聞社もあるという。

ある意味で当然の反応ではあるが、それでは震災の記憶は一時的に消費されるだけで終わってしまう。

「呼び覚まされる霊性の震災学」は、「現代の『遠野物語』」と形容されることがある。「遠野物語」が記された明治後期の頃から、東北地方では

「座敷わらし」のような幽霊現象は当たり前のように語られていた。現代でも、東北地方で聞き取り調査をしていると、「幽霊を見た」という話がしばしば出てくる。

## 戻ってくるかも しれないという わずかな可能性

ところが、阪神・淡路大震災の調査でも、原爆投下後の広島や関東大震災、東京大空襲でも死者が幽霊として現れたという挿話は聞かない。理由ははっきりしないが、こうした幽霊の存在を否定しない東北の感

性は、関東以西で一般的な仏教的な感覚とは明らかに異なる。

仏教では、死者は三途の川を渡って死者の国に移るのが本来のあり方であり、魂が現世に留まっているのは、この世に恨みや未練を残したまま成仏できないからで、それを不幸なことなのだと思える。冒頭の幽霊話に寄せられたネット上の感想にも、「死にきれないのでしょね。気の毒に」と同情・共感する人が多い。

だが、それは現地の感覚とはやや異なる。東北地方では、幽霊は必ずしも否定的な存在と思われてはいないのだ。冒頭のエピソードを語ってくれたドライバーも、「最初は怖くて動けなかったが、今はもう恐怖心はない。また同じように季節外れの冬服を着た人がタクシーを待っている、乗せるし、普通のお客さんと同じ扱いをする」と言っていたという。そのドライバーも、震災で娘さんを亡くしている。

幽霊を見たという他のタクシード

人の心の回復こそが真の復興だ。その後押しのためには、人々の死生観をまず問わなければならない。

ドライバーたちも、幽霊を怖がって「もう二度と出てこないでほしい」と言うことは少ない。もっと温かい眼差しで幽霊を見ている。

どうやら東北の地では、生者の世界と死者の世界の境界は曖昧で、幽霊という中間的な存在も認められているかに思われる。

東日本大震災では、津波にのまれ、遺体のないまま行方不明となつてしまったケースも多い。そうした場合、残された家族は対応に困ることになる。遺体のないまま葬儀を行い、お墓を作るのか。戻ってくるかもしれないというわずかな可能性を信じるのか。そうした宙ぶらりんの状態は「曖昧な喪失」と呼ばれている。

今回、論文集を作る過程で私たちが発見したことは、被災地の人々は、自らの曖昧な喪失を大切に抱え続け、終わったこととして自分の中から消し去ろうとはしていない、という事実だった。

おそらく曖昧さを温存することこそ、愛する者を失った痛みへの、この地の人々の対処法なのだろう。「幽霊を見た」という多くの人が語る体験も、そこからきているのではないのか。震災で残された人々は、「消さずに残すことに意味があるのだ」という答えを、すでに自らの中に持っているのではないだろうか。

久保田正志=構成  
共同通信フォト=写真